

5. 調査施設の概要

調査票を郵送した 200 施設のうち、166 施設より回答を得た（有効回答率 83%）。施設の概要は表 1 に示した。

分類*	分類基準	施設数	病床数			入院患者数			院外処方せん発行率			薬剤師数			薬剤師1人あたりの入院患者数		
			平均	最低	最大	平均	最低	最大	平均	最低	最大	平均	最低	最大	平均	最低	最大
1	$n \leq 30$	68	750.5	257	1423	625.4	135	1194	69.3%	0.0%	96.8%	25.99	4.76	58.22	24.81	15.38	30.0
2	$30 < n \leq 50$	65	656.9	263	1500	569.9	235	1196	59.9%	0.0%	96.3%	15.78	6.707	31.6	36.76	30.02	49.2
3	$50 < n$	30	565	250	825	496.9	180	781	31.1%	0.0%	96.5%	7.85	3.433	12.71	66.98	50.25	161.9
4	療養・精神	3	1039	703	1547	1014	650	1547	20.2%	0.0%	32.7%	6.98	4.8	10.08	142.8	135.4	153.4

*: 薬剤師1人中の入院患者数を「n」としたとき、 $n \leq 30$ を「1」、 $30 < n \leq 50$ を「2」、 $n > 50$ を「3」、主に療養・精神病床施設を「4」

表 1 調査施設の概要

6. 調査結果

I. 院内感染対策

現在各施設では、院内感染対策委員会を設置し、耐性菌による院内感染防止に取り組んでいる。院内感染の防止には、医師、薬剤師、看護師、臨床検査技師などでチームを作り、各々専門的な役割を果たすことにより効率的な対策が可能である。すなわち、抗菌剤の適正使用については患者の膿、喀痰、尿などから耐性菌の検出状況の把握、院内での抗菌剤使用量の把握、TDMの実施などから得た多くの情報に基づく評価、消毒剤については院内での使用実態の把握、消毒薬の抗微生物効果の評価などが必要である。これらの達成には薬学的知識の利用が必須であり、感染管理に薬剤師の積極的な関与が求められる。このような認識のもと院内感染対策における薬剤師の関与・貢献状況調査を行った。

院内感染対策委員会の薬剤師人数（設問1）については、166施設中165施設で「院内感染対策委員会」を設置し、委員に薬剤師が1名から3名就任し、その役割を果たしていることが伺える。また、適正な抗菌剤を選択するために欠くことができない耐性菌の同定、薬剤感受性の確認、薬物血中濃度などの情報提供（設問-2）、院内での抗菌剤使用調査・解析結果の報告（設問-3）については実施率が69%、71%、医療の安全確保の面から病棟などで使用する消毒薬については、「消毒薬の取扱い指針」を遵守し薬剤部で希釈調製し、交付している（設問8）施設は66%であり、薬学的知識を活用した積極的な院内感染防止への貢献が行われている（図-1）。